

一般演題3 O3-7

腸閉塞・イレウスに対する高気圧酸素療法の有用性—920例の検討—

西森英史 澤田 健 三浦秀元 平間知美
大野敬祐 柏木清輝 鬼原 史 矢嶋知己
八十島孝博 岡田邦明 秦 史壯

札幌道都病院 外科

【緒言】

腸閉塞あるいはイレウスに対する加療は、一般的に絶食による腸管安静、経鼻胃管あるいはイレウス管留置による腸管減圧、高気圧酸素療法(HBO)そして外科的手術である。HBOは特殊な器機を要するが非侵襲的であり、減圧チューブ留置時でも施行可能な治療法である。

【目的】

腸閉塞あるいはイレウスに対する高気圧酸素療法の有効性および安全性を検討した。

【対象】

2011年6月から2021年3月末までの10年間に当院で施行したHBO 1042例中、腸閉塞あるいはイレウスを対象とした920症例。診断時に腹部所見、血液検査(特に血液ガス分析による乳酸値)や造影CT検査による腸管血流評価等で絞扼性腸閉塞が否定されていること、嘔吐や閉所恐怖症、重度の認知障害等のない症例を対象とした。ヘルニア嵌頓整復後や腫瘍による腸閉塞症例(大腸ステント留置後)は相対的適応とした。HBO施行期間は連日慎重な観察を行い、絞扼性変化など状態悪化時には速やかに手術を施行しうる体制を整えて施行した。

【結果】

平均年齢は72.2歳。男性458例、女性462例。腹部手術後(30日以内)症例は177例(19.2%)、腹部手術歴のある症例516例(56.1%)、開腹歴なし症例227例(24.7%)。経鼻胃管併施例は202例(22.0%)、イレウス管併施例は100例(10.9%)。全症例のHBO平均施行回数は5.2回であった。全症例におけるHBO有効例(腸閉塞あるいはイレウス改善例、具体的は経口摂取再開あるいは画像所見の改善を認めた症例)765例(有効率83.2%)、無効155例(16.8%)。無効

例の49.0%(76例)および有効例の3.0%(23例)に手術が施行された。無効例76例中、45例(59.2%)に癒着剥離術あるいは嵌頓整復術が施行された。31例(41.8%)に腸管壊死あるいは狭窄を認め、腸切除を要した。術死は2例(2.6%)に認めた。

経鼻胃管あるいはイレウス管併施例を除いた618例(HBO単独例)において、HBO有効は45例(有効率88.2%)、無効は73例(11.8%)でHBO平均施行回数は5.2回vs 2.9回($p=0.0016$)であった。経鼻胃管あるいはイレウス管併施例は302例で、HBO有効は220例(有効率72.8%)、無効は82例(27.2%)で、HBO単独例の方が有効率は有意に高い($p<0.01$)結果であった。

HBO中断を要した合併症は17例(1.8%)で、耳痛が13例、不整脈が2例、中耳炎および血圧低下が1例であった。また左記の合併症に加え、閉所恐怖症、治療拒否、不穏等でHBOを完遂できなかった症例は62例(6.8%)であった。

【考察と結語】

HBOは重篤な合併症なく安全に施行可能である。有効率は83.2%と高く、適切にHBOを施行することにより、侵襲的なイレウス管留置や手術を回避できる可能性が高くなると思われた。またHBOを3回施行することで、そのままHBOで治療可能か否か、大まかな指標が得られる可能性も示唆された。但しHBO無効と判断した症例には、イレウス管留置や手術など、次の治療のタイミングを逸しないことが重要である。また胃管やイレウス管併施例では明らかに有効率は低く、これらの治療法との棲み分けや共存の基準など、まだまだ検討を要する不確定要素も多い。

文献的には腸閉塞あるいはイレウスに対するHBOは海外では一般的ではなく、ガイドライン等にも記載がない。しかし日本では保険適応のある有用な治療法の1つであり、世界に向けて大規模試験等でのデータ集積が望ましい。